

【旧約聖書日課】列王記上 17章8～16節

8また主の言葉がエリヤに臨んだ。9「立ってシドンのサレプタに行き、そこに住め。わたしは一人のやもめに命じて、そこであなたを養わせる。」10彼は立ってサレプタに行った。町の入り口まで来ると、一人のやもめが薪を拾っていた。エリヤはやもめに声をかけ、「器に少々水を持って来て、わたしに飲ませてください」と言った。11彼女が取りに行こうとすると、エリヤは声をかけ、「パンも一切れ、手に持って来てください」と言った。12彼女は答えた。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」13エリヤは言った。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。14なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。

主が地の面に雨を降らせる日まで
壺の粉は尽きることなく
瓶の油はなくなるらない。」

15やもめは行って、エリヤの言葉どおりにした。こうして彼女もエリヤも、彼女の家の者も、幾日も食べ物に事欠かなかった。16主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙 14章10～23節

10それなのに、なぜあなたは、自分の兄弟を裁くのですか。また、なぜ兄弟を侮るのですか。わたしたちは皆、神の裁きの座の前に立つのです。11こう書いてあります。

「主は言われる。
『わたしは生きている。
すべてのひざはわたしの前にかがみ、
すべての舌が神をほめたたえる』と。」

12それで、わたしたちは一人一人、自分のことについて神に申し述べることになるのです。

13従って、もう互いに裁き合わないようにしましょう。むしろ、つまずきとなるものや、妨げとなるものを、兄弟の前に置かないように決心しなさい。14それ自体で汚れたものは何もないと、わたしは主イエスによって知り、そして確信しています。汚れたものだと思うならば、それは、その人にだけ汚れたものです。15あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません。食べ物のことで兄弟を滅ぼしてはなりません。キリストはその兄弟のために死んでくださったのです。16ですから、あなたがたにとって善いことがそしりの種にならないようにしなさい。17神の国は、飲み食いではなく、聖靈に

よって与えられる義と平和と喜びなのです。¹⁸このようにしてキリストに仕える人は、神に喜ばれ、人々に信頼されます。¹⁹だから、平和や互いの向上に役立つことを追い求めようではありませんか。²⁰食べ物のために神の働きを無にすることはなりません。すべては清いのですが、食べて人を罪に誘う者には悪い物となります。²¹肉も食べなければどう酒も飲まず、そのほか兄弟を罪に誘うようなことをしないのが望ましい。²²あなたは自分が抱えている確信を、神の御前で心の内に持っていないさい。自分の決心にやましさを感じない人は幸いです。²³疑いながら食べる人は、確信に基づいて行動していないので、罪に定められます。確信に基づいていないことは、すべて罪なのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章22～27節

²²その翌日、湖の向こう岸に残っていた群衆は、そこには小舟が一そうしかなかったこと、また、イエスは弟子たちと一緒に舟に乗り込まれず、弟子たちだけが出かけたことに気づいた。²³ところが、ほかの小舟が数そうティベリアスから、主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた場所へ近づいて来た。²⁴群衆は、イエスも弟子たちもそこにいないと知ると、自分たちもそれらの小舟に乗り、イエスを捜し求めてカファルナウムに来た。²⁵そして、湖の向こう岸でイエスを見つけると、「ラビ、いつ、ここにおいでになったのですか」と言った。²⁶イエスは答えて言われた。「はっきり言うておく。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからだ。²⁷朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもなくならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証されたからである。」

いつまでもなくならないパン【こども説教のために】

わたしたちは、毎日、食事をします。食べ物を食べなければ、生きることができないからです。「主の祈り」でも、「わたしたちの日ごとの糧を今日もお与えください」と祈ります。毎日、必要なだけの食べ物が得られるのは、決して当たり前のことではないのです。いつまでもなくならない食べ物を手に入れられるならば、きっと安心して生きていけるに違いありません。

昔の預言者エリヤは、飢饉のとき貧しい母子の家に行きました、母親は息子と食べるための最後のパンの材料しか持ち合わせていませんでしたが、エリヤの言う通りにすると、パンの材料、粉と油は、いつまでも尽きることなく容器に残されるようになったのです。

主イエスは、五千人の人が集まっていたとき、一人の少年が持っていた二匹の魚と五つのパンを皆に分けて、満腹にさせられました。

エリヤや主イエスは、魔法を使ったのでしょうか。それともお金を使ったのでしょうか。いいえ、神の言葉を聞いたのです。神の御心を尋ねることに、心を用いたのです。神は、本当にわたしたちを生かすものが、ただの食べ物よりももっと大きなものであることに、気づかせてくださるでしょう。

食べ物のことと…

四年前、今日と同じ主日聖書日課を与えられた日曜日の礼拝で、わたしたちの教会は半年ぶりの聖餐を祝いました。およそ半年の間、わたしたちの教会は、聖餐の食卓だけでなく、一切の飲食、食事の交わりを取りやめていたのです。

ようやく聖餐の祝いを再開したその日を迎えるために、教会役員会は、パンと杯について議論を重ねました。従来の方法では実施が困難だと思われたからです。パン屋で購入しサイコロ状に切り分けて用いていたパンは、専門店から取り寄せる聖餅（ホスチア）に替え、配餐奉仕者が器具を用いて配ることにしました。ガラス容器に注いでいたブドウ汁は、使い捨てのプラスチック容器に注ぎ、やはり衛生手袋をした配餐奉仕者が配ることにしました。聖餐の方式、つまり食べ物のこと、飲み食いのことで、それまでと大きく変更となる判断をしたのです。幸い、教会の皆さんにはご理解いただいて四年前、続けていくことができました。

もっとも、異論があっても言い出しにくいのが現実だった、というのも確かなことです。実際、従来の方式に戻してほしいと願われている方は、一人や二人ではないでしょう。現在の方式になって、聖餐にあずかることを避けられている方もあるかもしれません。それでも、声を上げることをせず、黙って受けとめてくださってきたのは、今日パウロが教えているように、**互いに裁き合わないようにと心がけ、食べ物のことと神の働きを無にしないよう**にと願ってくださっていたからなのでしょう。

どういうわけか、わたしたちは、食べ物のことと揉めるのです。いつ食べるかで揉め、どこで食べるかで揉め、誰と食べるかで揉め、どのように食べるかで揉める。選択肢があるからこそ、揉めることもあるのでしょう。しかし、選択しようのない極限状態に置かれれば、今度は、食べるのか食べないのか、限られたものを誰が食べるのか、ということで揉めるかもしれません。もちろん、表向きは揉めないようにするため、身を引くこともあるでしょう。ところが、「食べ物への恨み」というのは根深いものです。

わたしは、高校生の頃から教会の同世代の仲間と教会学校、キャンプ、子ども伝道など、さまざまな活動を一緒にし、寝食を共にすることも少なくありませんでした。血気盛んな青年同士です、衝突することも少なくありませんでした。今でも当時の仲間と会って話題になるのは、食事のことと衝突したときのことで、笑い話とできるのは、衝突してもなお関係を続け、**食べ物のために神の働きを無にしない**という同じ思いを抱く信仰の家族としての絆を結ぶことができたからでしょう。そうであればこそ、わたしは、むしろ今でも、食事の交わりを実践することにこだわり続けているのです。

小さいパン菓子

主イエスが五千人の人々と共にパンを食べられた出来事は、ただの食事会でも、炊き出しでも、なかったのでしょうか。日常の一コマとは違う、特別な食事の出来事だったのです。四福音書は、共通してその出来事を「パンの出来事」と呼んで伝えているのです。

福音書日課は、「パンの出来事」を指して、「**主が感謝の祈りを唱えられた後に人々がパンを食べた**」と要約しています。これだけでは、五千人もの人がわずかの食べ物、五つのパンと二匹の魚しか手元になかった主イエスから満腹になるまで分け与えてもらったという、あの出来事の驚きは伝わってきません。いいえ、確かに人々は、あの出来事に驚き、その後も主イエスを捜し、わざわざ追って来たのです。もう一度、あの出来事を味わいたいと願ったのでしょうか。これからも、あの出来事のように食べ物を分け与えてもらいたいと願ったのでしょうか。けれども、その出来事の本質は何だったのか。「**主が感謝の祈りを唱えられた後に…パンを食べた**」ことだったのではないか。それに尽きるのではないか。

使徒パウロは、**神の働きを無にしないためであれば、愛に従って歩むため**であれば、自分に与えられた自由や信仰の確信を譲るのが望ましいと言っています。「**神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです**」と言うのです。けれども、そうだからと言って、食事の交わりを避けたわけではないのです。教会の中で「**主の晩餐**」（I コリ 11:20）を整えることを勧め、嵐に揺れる船の中、人々の前で**パンを取って神に感謝の祈りをささげてから、それを裂いて食べ始め**（使徒 27:35）るということをして見せることもあったのです。

「感謝の祈りを唱えてから、パンを食べる」。主イエスが五千人の人々を驚かせたのも、パウロが嵐に怯える同船の者を励ますことになったのも、同じことでした。主イエスもパウロも、人々の前で、まず神に感謝の祈りをささげたのです。パンを感謝し、与えられたものを感謝し、生かされていることを感謝したのです。小さなパンを食べるには大袈裟なほどに、神に感謝をささげたのです。いいえ、小さなわずかなパンを手のひらに受けとめたときだからこそ、大きな存在、すべての物をお与えくださる方、命の源であるお方に心を向け、感謝の言葉を唱えられたのでしょうか。

預言者エリヤは、やもめに小さなパン菓子を作らせました。皆が、わずかなパンを手を受けていました。それは、神の大いなる御業に心馳せるのに十分なものでした。

それは、神のお与えくださるものなのです。それをいただく者は、神のパンをいただくのです。神の御心をいただくのです。